

press release

前売券好評販売中!

木村伊兵衛
IHEI KIMURA
写真に生きる
Living in Photography



秋田おばこ、大曲、秋田、1953 ©Naoko Kimura

2025 12.13 Sat. → 2026 2.8 Sun.

【開館時間】9:00～17:00(金曜日は19:00まで開館) ※入場は閉館の30分前まで ※12月13日は10:00開場

【休館日】年末年始(12月25日[木]～1月1日[木])

【入場料】一般1,500円／高・大学生1,000円／小・中学生700円

◎会期中、本展チケットのご提示(半券可)により、100円で繪景園にご入園いただけます。



※前売・20名以上の団体は当日料金より200円引き ※学生券をご購入・ご入場の際は、学生証のご提示をお願いします。

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳及び戦傷病者手帳の所持者と介助者(1名まで)の当日料金は半額です。手帳をご提示ください。

※前売券は、広島県立美術館、セブンチケット(セブン・コード:112-762)。

広島市・呉市内の主なプレイガイド、画廊・画材店、ゆめタウン広島、中国新聞社読者広報部などで販売しています。

主催:広島県立美術館、イズミテクノ、中国新聞社、中国放送

後援:広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島、エフエムふくやま、尾道エフエム放送、FMはつかいち76.1MHz

協賛:広島県信用組合、一般財団法人ケンシン地域振興財団 企画制作:クレヴィス

※開館情報等に変更の生じる場合がございます。最新情報は広島県立美術館(電話・HP・SNS)まで

<https://www.hpam.jp/museum>

 広島県立美術館
Hiroshima Prefectural Art Museum

「よく私を人物写真家だというが、町の肖像写真家が直接相手とじか取引きをするような意味での個人的な人物は撮らない。何か印刷物を通して一般に発表するために撮影をする。これは印刷物を通してその人を知らせるのであるから、単に相手方の好みに合ったものではなく、その人の生活環境なり性格なり、または社会的にどういう人であるかということを写し出しているつもりである。時には、美しく、ながめて楽しい女性を撮ることもある。しかしその女性が人形ではなく、やはり今日の人として生活している点を、どこかでみのがしたくない。」

『木村伊兵衛傑作写真集』1954年、朝日新聞社、11頁。



秋田おばこ、大曲、秋田、1953

【開催主旨】

日本を代表する写真家、木村伊兵衛（1901-1974）は、1920年代に実用化が始まった小型カメラに写真表現の可能性をいち早く見出し、日常を素早く切り取るスナップショットで名声を確立した。本展では、歌舞伎などの舞台写真、カラーフィルムによる滞欧作品、秋田の農村を捉えたシリーズなど、人間の営みの美しさを伝える約165点の選りすぐりの作品によって、写真史に大きな足跡を残した木村伊兵衛の活動を振り返る。



ライカを構える木村伊兵衛自写像、1965

第1章 夢の島——沖縄

1935（昭和10）年に東京で開催された民俗舞踊大会で琉球舞踊を初めて観た木村は、強い感銘を受けて連日会場に通った。夢のような島という印象を受け、翌年には4日間の船旅で沖縄へ渡航。風俗習慣が違い、言葉も通じない、古い文化の残る島で夢中でシャッターを切った。この一連の作品が、木村が世に出るきっかけとなった。



那覇の市場、本通り、沖縄、1936

「沖縄の作品は、いわば私の出世作であった。その中でも一番好きなのは「市場」である。道の両側にずらりと市が立つ。この長い市場を映画で移動撮影をする感じを、一枚の写真で表現しようとして作ったのが、この作品である。」

木村伊兵衛「作品鑑賞のために 傑作が生れる前後」『木村伊兵衛読本〈フォトアート臨時増刊〉』1956年8月、研光社、101-102頁。

第2章 肖像と舞台

木村の最初の個展「ライカによる文芸家肖像写真展」は1933（昭和8）年に東京、銀座で開催された。従来の大型カメラで正面からきっちり捉える肖像写真ではなく、小型カメラで被写体の性格や感情の動きまでも生き生きと捉えた写真は、「ライカの名手」としての名声の出発点であり、日常生活の自然さを尊重して撮影する姿勢の原点ともなった。

第3章 昭和の列島風景

東京下町に生まれ育った木村は、一貫して都市の日常風景をスナップショットで記録し続けた。しかし戦争が日常化するにつれ、写真による国家宣伝に関わることを余儀なくされた。戦争が終わり、戦後の混乱のなかで、自らの写真表現の方向性を模索するなか、あらためて報道写真こそ自分の写真の道であるという覚悟を新たにした。



若い人、広島、1946

第4章 ヨーロッパの旅

木村は 1954（昭和 29）年秋、初めてヨーロッパを訪問する機会を得た。南欧から北欧までを巡る駆け足の旅ではあったが、パリではアンリ・カルティエ＝ブレッソンやロベール・ドアノーといった写真家との出会いもあり、心ゆくまで彼なりのやり方で人びとにカメラを向け、また自らの写真への姿勢を再確認することができた。

第5章 中国の旅

木村は戦前と戦後に数回ずつ中国の旅をしている。戦前、満州国建国と日中戦争という重苦しい空気が立ちこめた時代にも中国の庶民の日常を捉えている。戦後、中国の人たちの表情がそのつど明るくなっていることを感じたという。そのときそのときの時点のものとして記録し、伝えようと、生活を主とした写真を撮り続けた。

第6章 秋田の民俗

1952（昭和 27）年、秋田県総合美術展覧会での審査のために秋田を訪れた木村を、秋田在住のアマチュア写真家たちが県内の象潟や横手などの農村へと案内した。生活の実態を目の当たりにして感動した木村は、そこにこそ自分の探し求めたテーマがあると確信し、1971（昭和 46）年までの 20 年間、秋田に 21 回通い続けて、319 本のフィルムに収めた。



板塀、追分、秋田、1953

「ちょうど野良から仕事を終えて帰る牛、馬車がこの前を往き来します。ここで牛や馬を挽く人物を取り入れれば七三の定石であって、ロングに引いてまとめた場合は絵画的な表現になってしまうわけです。が、ここで考えたことは板塀のマチエールとともに人々の生活も表現するために馬を取り入れることでした。この点において、やっとな私として狙ったものがとらえられると思ったのです。」

第7章 パリ残像

本章では、1954 年、1955 年と続けて行われたヨーロッパの旅〔第4章参照〕の中から、パリに住まう人々を撮影したカラー写真を紹介する。当時はモノクロ写真が主流であったが、木村は「日本人が見た色彩の表現」に意欲的に取り組み、カラーフィルムを用いて生きた街——パリの表情を捉えようとした。



ミラボー橋、パリ、フランス、1955

「カラー写真は、それまで海外で写されてきたものを、スライドや写真雑誌でみると、いずれも派手で決して色をこなしているとは思われない実状であったので、フィルムのもっている派手な発色をおさえ、各国の生活の中から出てくる色彩を、私という一日本人が感じたままに表現することにした。」

木村伊兵衛「作品鑑賞のために 傑作が生れる前後」『木村伊兵衛読本〈フォトアート臨時増刊〉』1956年8月、研光社、110頁。

【関連イベント】

① 記念講演会「木村伊兵衛とヨーロッパの写真家たち」

1月10日（土）13時30分～15時 [開場 13時]

講師：甲斐義明（新潟大学准教授）

会場：地階講堂

共催：広島県立美術館友の会

※聴講無料 ※要事前申込（電話 082-221-6246）

② 美術講座「木村伊兵衛を読む—写真と言葉を通して」

2月1日（日）13時30分～14時30分 [開場 13時]

講師：山下寿水（当館主任学芸員）

会場：地階講堂

※聴講無料 ※要事前申込（電話 082-221-6246）

③ ギャラリートーク

12月19日（金）、1月9日（金）、1月23日（金）、2月6日（金）

各日 11時～、17時～

会場：3階展示室

講師：当館学芸員

※要入館券 ※事前申込不要

④ インスタライブ

12月23日（火）、1月13日（火）

各日 17時～

講師：当館学芸員

公式Instagramはこちらから



⑤ 学芸員によるポッドキャスト

詳しくは当館（HP・SNS）にて

⑥ 撮影ワークショップ

「お庭で撮影会」

12月20日（土）及び21（日）13時30分～15時30分〔受付13時～〕

講師：藤岡亜弥（写真家、第43回木村伊兵衛写真賞受賞者）

会場：縮景園、広島県立美術館

持物：カメラまたはスマートフォン

参加費：1,000円 ※要本展入館券、入園券

※先着15名（両日参加可能な方） ※要事前申込（電話082-221-6246）

⑦ ロビーコンサート

「にほんのうた 昭和100年」

2月1日（日）12時～

演奏：東京オペラシンガーズ

会場：1階ロビー

※鑑賞無料 ※事前申込不要

縮景園連携企画

美術館 × 縮景園 連携スタンプラリー

戦後間もない1947年、木村伊兵衛は縮景園に訪れて写真を撮影しました。

このことにちなんで、会期中、本展にちなんだスタンプラリーを縮景園で実施します。

※要入園券 ※要スマートフォン

【開催概要】

メインタイトル：木村伊兵衛 写真に生きる

英 語 名：Ihei Kimura - Living in Photography

会 期：令和 7 年 12 月 13 日（土）～令和 8 年 2 月 8 日（日）

休 館 日：年末年始（12 月 25 日～1 月 1 日）

開 館 時 間：9：00～17：00（金曜日は 19：00 まで開館）

※入場は閉館の 30 分前まで ※12 月 13 日は 10:00 開場

料 金：一般 1,500 円 高・大学生 1,000 円 中学生以下 700 円

※前売り・20 名以上の団体は当日料金より 200 円引き

※会期中、本展チケットのご提示（半券可）により、100 円で縮景園にご入園いただけます。

※学生券をご購入・ご入場の際は、学生証のご提示をお願いします。

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳及び戦傷病者手帳の所持者と介助者（1 名まで）の当日料金は半額です。手帳を提示してください。

※前売券は、広島県立美術館、セブンチケット（セブン - コード：112-762）、広島市・呉市内の主なプレイガイド、画廊・画材店、ゆめタウン広島、中国新聞読者広報部などで販売しています。

開催クレジット

主 催：広島県立美術館、イズミテクノ、中国新聞社、中国放送

後 援：広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島、エフエムふくやま、尾道エフエム放送、
FM はつかいち 76.1MHz

協 賛：広島県信用組合、一般財団法人ケンシン地域振興財団

問い合わせ先：広島県立美術館

〒730-0014 広島市中区上幟町 2-22

TEL.082-221-6246 FAX.082-223-1444

E-mail：iroeuma2@gmail.com

担当：学芸課 山下寿水

広報担当：総務課 一色直香

公式 SNS はこちらから



【媒体掲載用の画像提供について】

※いかなる場合も本プレスリリースからの転用はご遠慮ください。

※都合により出品作品が異なる場合がございます。ご了承ください。

※画像については提供が可能です。掲載の際に画像が必要な場合は、当館へお問い合わせください。

※画像掲載の際には、画像とテキストが掲載されたレイアウト原稿を事前に当館へ提出していただき、

1 週間程度お時間を頂きます。ご了承ください。

※展示室内での筆記具の使用は鉛筆のみお願いします。（ボールペンなど使用不可）